

## 「食」にかかわることわざの日中比較

徐 小 艶

### Comparison Between Japanese and Chinese Proverbs of Food

Xiaoyan Xu

**Abstract:** The language is a mirror which reflects the national characteristic. The proverbs, which have concentrated people's intelligence, especially reflected the national personality. There are a large number of proverbs related to food in Japanese and Chinese. This paper has collected some Japanese and Chinese proverbs related to food and analyzed the origins of the proverbs in the living environment and folk-custom, etc. Based on comparison and analysis of these proverbs, the culture background, folk-custom, similarities and differences of national psychology between Japan and China was preliminarily discussed in this paper.

**Keyword:** food, proverb, Japanese, Chinese

#### はじめに

よく「ことわざは知恵の結晶」といわれる。誰からともなく、いつからともなく、長い間に生活の知恵として、人々の口から口へと伝承されてきた気の利いた文句がことわざである。ことわざは生活の中から生まれてきたものであり、民衆の知恵の宝庫、文化の遺産ともいえよう。中国と日本は一衣帯水の隣国であり、古くから交流の伝統を持っており、と同時にそれぞれ違う風土、風俗、習慣、文化を持つ国でもある。両国の間にはそれぞれの文化、生活、社会を反映したことわざが数え切れないほどある。「食」に関して、日本語のことわざでは「食は命の親」、中国語では「民以食为天」(民は食を天と為す)がある。両国の人民は元来食生活を大変重視し、「食」に関することわざも大量に残された。本稿は「食」にかかわる一部のことわざに絞り、その類似、相違を比較することによって両国人民の生活習慣や、文化心理などを探ってみたいと思う。

---

\* 教養部

## 「旬」にかかわる日中ことわざの対比

「食」に関わる日本語のことわざの中で最も多いのは「旬」や「季節の味」を表すものであろう。「花時は鯛の旬」、「土用の丑に鰻」、「秋鯖は嫁に食わすな」、「寒鰯、寒鰯、寒鰯」のようなことわざは魚を通して春夏秋冬の旬の食べ物のおいしさを表している。「秋茄子は嫁に食わすな」、「蕨が出染めるとむつごろうが泣く」のようなことわざは野菜を通して季節の食べ物のおいしさを表している。日本では「旬」や「季節の味」を象徴する食べ物は実に多種多様である。日本列島は熱帯と寒冷地域との中間にあって、四季がはっきりしていて、自然の変化に富んでいる。このような地理環境で生活していた日本人は自然に親しみ、自然の変化に敏感である。食生活においては食べ物の自然の風味をできるだけ保とうとする習慣がある。「旬」や「初物」のような語彙はほかの言語にはあまり見られず、いかにも日本人らしい発想で日本語っぽい表現である。

中国語のことわざの中にも「八月的蟹子盖儿肥」(陰暦八月の蟹は一番の食べごろ)、「純初早韭、秋末晚菘」(初春の韭、晩秋の白菜は最もおいしい)、「秋冬食獐、春夏食羊」(秋と冬はキバノロの肉、春と夏は羊の肉を食べる)のような「季節の味」を表すことわざがあるにはある。しかし、これは「食」に関わるすべてのことわざの中での占める割合は極めて低いのである。日本語の「旬」や「季節の味」を表すことわざと比べればさらに比率は低い。中国人は東部や南部を除くと大部分が内陸に集中しており、また西部や北部の人たちは遊牧民族と頻繁に接触している。このような地理的な環境で生活している人たちは魚より肉を好みよく食べる。また、肉の調理法と言えば大量の調味料を使い、素材本来の味から離れた別の味に仕上げるのが好まれる傾向にある。このような食材、または調理法は日本人の素材の自然の風味を重要視する感覚と比べると確かに季節感が乏しいのである。

## 「魚」にかかわる日中ことわざの対比

日本語の中の「魚」にかかわることわざは数多くある。「夏は鰹に冬は鮪」、「春は貝、秋は蛸」のような季節の味、旬を表すものもあれば、「腐っても鯛」、「人は武士、魚は鯛」のような日本人の独特の価値観を表すものもある。「鰯の頭も信心から」、「魚も食われて成仏す」のような宗教・信仰を表すものもあれば、「海老で鯛を釣る」、「鰯網で鯨の大功」のような利害・損害・実利を表すものもある。「魚」にかかわることわざは日本人の食生活に関与するばかりではなく、日本人の価値観、人間関係、宗教・信仰をも表している。日本は南北に細長い島国であり、恵まれた自然環境で豊富な魚類を育んだ。古くから魚は日本人の社会生活で重要な地位を占めていた。日本列島は魚の産地であり、日本人は魚を

愛し、その言葉も自然に魚にかかわるものが多い。さまざまな「魚」或いは「漁」にかかわることわざは日本人の生活習慣、心理の特徴、国民の性格を反映している。また、日常生活の中で頻繁に使われる「魚」にかかわることわざは日本文化の重要な特徴のひとつであると言えるだろう。

一方、中国語の中の「魚」にかかわることわざはどうであろうか。「吃了河豚，百样无味」(河豚を食べたらほかの食べ物全部味がなくなる)、「五月鯉賽如活人參」(五月の鯉は朝鮮人參に勝る)のようなものがあるが、日本語に比べれば、圧倒的に少ない。海に囲まれている日本に対して、中国は東方こそ太平洋に面しているが、西方は山岳地帯や砂漠が延々と続いている。だから、中国人の印象では、魚と言えば、海の魚ではなく、淡水魚である。沿海地方に住む人たちを含めて、多くの中国人は魚の正式名称をあまり知らないし、特に知りたいとも思っていない。例えば、魚の美味を表現することわざは日中ことわざ両方でも見られる。中国語では「酒怕牛肉魚怕飯」(酒には牛肉は最適、ご飯には魚は最適)があるが、この魚はどんな種類の魚かは明確にされていない。一方、日本語の中では「米の飯に鯛の魚」、「寒鱈一本米一俵」などがある。このようなことわざの中の魚は名前があり、明確に示されている。もう一つ例を挙げてみよう。日本語の「腐っても鯛」に当たることわざは中国語では「瘦死的骆驼比马大」(どんな瘦せた駱駝も馬より図体がでかい)となる。二つのことわざの違いの背景には四方を海に囲まれた海洋国日本と、大陸西部に巨大な砂漠を有し、一生、海を見ずに過ごす人々が珍しくない中国との環境の違いがあるのは言うまでもない。また、日本人の繊細で敏感、中国人のおおらかさの両国人民の国民性の相違も少々窺えるだろう。

「魚」にかかわることわざは日中で全く同種のものもある。これは大抵中国から日本に伝わったものである。例えば中国語の「鱼水之交」は、日本語の「水魚の交わり」であり、中国語の「水至清则无鱼」は、日本語の「水清ければ、魚は棲まず」である。言葉は直接国民の心理、性格、価値観を反映している。「水魚の交わり」は日中両国人民の相互依存の交友観を反映している。「水清ければ、魚は棲まず」は儒教文化背景のもとでの日中人民の中庸思想の反映であろう。もし、両国人民が、ある方面で同一の価値観、人生観を持っていなければ、これらのことわざは広く受け入れられず、また長く伝わらなかったことだろう。

### 「酒」にかかわることわざの日中対比

酒は日中両国の間で悠久な歴史を持ち、日本民族と中華民族は総じて酒好きな民族と言ってよからう。したがって、両国の言葉の中には「酒」にかかわることわざが多数残されている。

まず、酒好きを表す日中ことわざを見てみよう。日本語のことわざでは「酒と真実は良き友」、「酒は天の美禄」、「酒は百薬の長」、「朝酒は門田を売っても飲め」など、実に多数挙げられる。中国語では「酒壮英雄胆」（酒を飲むと英雄はますます度胸がつく）、「酒逢知己千杯少」（知己に逢えば酒は千杯も少なき）、「酒是解乏的良药」（酒は疲れを癒す良薬である）などが挙げられる。中国では古来より飲酒は男子の一種の嗜みで交際上では欠かせない存在であったらしい。特に詩人たちは事毎に酒を飲み、多くの酒を賛美する詩を残した。庶民の間でも、酒は憂いを晴らし、友人を作る手段として愛されてきた。日本でも長く飲酒の歴史がある。古来より神事には必ず酒がつきものである。この場合は、酒は神と人間との融合を図る一種の手段として飲まれてきた。現代社会においても、共に飲むことで集团的に一種の陶酔状態を引き起こさせ、その感覚を共有することによって、人間関係の中の共同体意識や連帯感を強化する目的がある。日本語のことわざでは「酒は本心を表す」、中国語のことわざでは「酒后吐真言」（酒を飲むと本心を語る）があるが、これは恐らく互いに飲酒によって、一体感を持ち、それではじめて本心を語る事が出来ると言える、人間の微妙な心理の反映であろう。酒はある意味では人間関係の潤滑油の役割を果たしている。

「酒よくことを成し、酒よく事を敗る」という日中両国の共通のことわざの言うとおり、酒にはポジティブな一面がある反面、ネガティブな一面もある。確かに少量を飲めば、陽気を助け、血気を和らげ、憂いを去り、興を発するなどの役割があるが、大量に飲めばまたよく人を害する。日本では酒と言え、アルコール度の低い清酒をさすが、中国では米で醸造した軽い酒はあるが、酒と言え、大抵アルコール度五十から六十度の強い酒をさすものが多い。酒の種類は違うが酒に酔い乱れて、狂気になり、喧嘩口論し、人の前で恥をかき、人格を失い、家を滅ぼす様々な害がある認識はかなり一致しているようだ。日中ことわざの中では、酒のこのネガティブな一面を反映するものが多く見られる。酒が健康を害することわざは日本では「酒は百毒の長」、「酒とタバコは長寿の障り」などがあり、大体同じ意味の中国語のことわざは「酒多伤身、气大伤人」（飲みすぎは体を壊す、短気は人を傷つける）「[酒是穿肠的毒药]」（酒は胃腸を通す毒薬）等が挙げられる。また、酒は度を過ぎると健康を害するばかりではなく、礼儀を失い、周囲にも迷惑をかけることになる。日本語のことわざでは「酒は礼に始まり、乱に終わる」、「酒が言わせる悪口雑言」などがあり、中国でも同じ意味の「酒后无德」（酒を飲むとモラルがなくなる）、「[酒醉话多]」（酒に酔うと雑言が多くなる）などがある。更に、酒色に溺れることによって、家庭の幸福を破壊し、国家の利益を脅かす例は古今歴史でよくある。先人たちはこれを戒めるために多くのことわざを残した。日本語では「女と酒には毒がある」、「酒と女は敵なり」など、中国語では「酒是色媒人」（酒は女色の仲人）「[酒色祸之媒]」（酒、女色は災いの仲人）などが挙げられる。

## 食と健康の関係を表すことわざの日中対比

健全な食生活は健康を維持する上には欠かせない存在である。日常生活で積み重ねた養生経験にかかわることわざは日中両国の言葉の中で多くある。調べてみるとかなり類似性を持つものが多いようだ。

まず、飽食は健康を害するものが挙げられる。日本語では「腹も身のうち」、「腹八分目に医者要らず」、「飽食暖衣は却って命短し」などがある。中国語では「飽食伤心，忠言逆耳」（飽食は気分を損ない、忠告は耳を逆らう。）、「饭吃八分饱，活到九十九」（腹八分は九十九歳まで）などがある。飽食や栄養過剰による生活習慣病が増える現代では先人たちが残した言葉は現代人にとって有意義な教訓であろう。

また、養生に有益な食べ物について日中両国人民の認識が一致するものも多い。茶は両国人民の共通する飲料として日常生活で極普通であり、養生の上でも有効なものであるようだ。日本語では「朝茶は七里帰っても飲め」があるが、中国語では「茶喝多了养性，酒饮多伤身」（茶は気質を養い、酒は体をこわす）、「粗茶淡饭保平安」（茶と飯は健康を保つ）などがある。無論、風土産物や生活習慣の差異によって、養生の食べ物は中日両国ではそれぞれ違うものがある。中国語では「冬吃萝卜夏吃姜，不用郎中开药方」（冬は大根、夏は生姜を食べると、医者の方をいらず）、「萝卜上了街，药房把嘴撅」（大根が出回ると薬局は不景気になる）、「青菜豆腐保平安」（野菜と豆腐は健康を保つ）など、日本語では「朝の林檎は金」、「豆を食べば病気しない」、「蜜柑が黄色になると医者が青くなる」などが挙げられる。これらのことわざに出てきた食べ物の品種は違うが、皆日常生活の中でよく見られる、庶民に親しまれる食べ物である。しかし、こういう食べ物こそ健康を維持する源であると先人たちが認識していた。贅沢な食生活を追及する現代人にとって、これらの事は有益で参考になるかもしれない。

## おわりに

本稿はいくつかの方面から「食」にかかわる日中ことわざの異同を比較してみた。よく「言葉は国民性を反映する鏡である」と言われているが、生活の中で生まれ、先人の知恵の宝庫としてのことわざは実にそれぞれの国の生活描写であると同時に、それぞれの国の国民の民族心理、民族文化の反映である。本稿は「食」にかかわる日中ことわざの比較を通して、両国人民の性格環境、国民心理、文化背景の異同を少々触れてみた。無論、「食」にかかわることわざは無数であり、比較したのは極一部に限られたものであった。そのため考察が十分であったとは言えず、論述は不十分で、また偏ったものが多かったかもしれ

ない。が両国の言語学者に少しでもお役に立てれば幸いと思う。また、これらのことわざを調べていくうちにその面白さ、奥深さをしみじみと感じており、これは今後の研究課題として残しておきたいと思う。

#### 参考文献

- 巩文輝編著『中国諺語大辞書』遼寧人民出版社 1991  
温端政主編『中国諺語大全』上海辞書出版社 2004  
温端政、王新華編『諺語分類辞書』出版社 2004  
楊艶、邱勝、陳彬編『中華諺語大辞書』中国大百科全書出版社 2007  
張一鵬編『諺語大典』漢語大辞書出版社 2004  
金丸邦三『日中諺辞典』同学社 2003  
池田彌三郎『暮らしの中の諺』創拓社 1989  
水谷静夫『ことわざの知恵』朝日新聞社 2002  
磯部真理『「食」 故事ことわざ事典』大和書房 1980  
西谷裕子『たべものことわざ辞典』東京堂出版 2005  
平野雅章『食のことわざ歳時記』講談社 1996

(平成 20 年 3 月 31 日受理)